

一 兵卒の従軍記
トラック諸島守備隊

富山県 畠嶋 俊雄

一 青春時代

我々の青春時代はすべて軍事一色、私は青年学校のころ喇叭手をしていたが、落下傘部隊に憧れて大日本航空青少年隊に志願し、立野ヶ原でグライダー訓練に参加していた。城端地区で二十人位だったが、部落では自分一人であった。訓練に参加する日は、会社のほうは有給扱いである。

昭和十七（一九四二）年徴兵検査。弟も十八歳で志願（戦車隊志望）した。弟は甲種合格、俺は第一乙種合格。子供の頃から何かにつけて弟の方が上であった。

我々八人兄弟は祖母の手によって育てられた。男が五人、成人すれば兵隊と決まっていた時代。なすことすべてお国のため、天皇陛下の御為に戦

身が引き締まり、これで娑婆とはお別れだなと思つた。

弟は岡田部隊に編入され、六月半ば仏印に向けて発つていった。出発前、班長殿の計らいで班長室で少時話をする。「俺達が死んでも家にや三人の男がいる」と笑つて別れた。夜中粛粛と営門を出て行く弟の部隊を無言で見送る。今生の別れと思つたが悲壮感はなかつたが遠ざかる軍靴の音がいつまでも耳に残つた。

自分は入隊後の検査に引っ掛かり、保健隊行きの羽目となる。一晚中男泣き、戦友達がなにかと慰めてくれた。

一期の検閲も終つた頃、歩兵第六十九連隊に動員が下り保健隊は解散し原隊に戻つた。しかし保健隊にいた者は留守部隊に遺される、とのこと。何の面目あつて家郷にまみえんとばかり准尉殿に泣きすがり、ようやく野戦隊に編入され、指揮班要員となる。

保健隊の不名誉を挽回せんと必死で演習に励む。

場に屍をさらすは男子の本懐とするところで、一家一門の名誉であると教えられて育つてきた。学校教育でも「華々しく手柄を立てて、白木の箱で帰つて来るぞ」と口癖のように言っていた。「死ぬ死ぬと言つて死んだもんはおらん」と祖母が笑つて言つていたものだ。

二 入 営

昭和十八年四月一日、村祭の日、志願で入隊する弟と共に家を出た。当時戦局は初頭の華々しさも薄れて、何となく逼迫した空気につつまれ、駅頭の見送りの関係者のみの少数であった。

祖母が車窓から手を握り「この日のために育ててきた。しつかり奉公たのむぞ」と泣きはしなかつた。発車のベルが鳴る。さすがにじんと胸がしめつけられる思い。しだいに遠のく山々が、見馴れた里が見納めになるかも知れないと思えば今更のように懐かしく眼底に焼き付く。駅々で次第に入営兵が増え、いつしか賑やかになり、やるぞという気負いが膨む。営門を入るときはさすがに

その結果、連隊長の賞詞を受け、まずは面目をほどこした。曰く、「向郷隊・畠嶋二等兵、元気がよろしい」というものである。中隊の石廊下に掲示されたうえ、連隊本部へ連れていかれ、親しく連隊長殿のお言葉を賜るなど大げさな取り扱いを受けたのである。

軍隊生活中、失せ物の員数合わせには苦勞した。また兵器は歩兵の生命、いや命よりも大切なものとして扱われる。「兵隊は一銭五厘の葉書一枚で集まるが、兵器は天皇陛下よりお預かりしたものである。絶対に損傷してはならない。ましてや紛失するがごときは最大の不忠と心得よ」と。

野戦隊に編入されてからは、かの有名なビンタはなかつた。俺には同村出身の中仙道上等兵がおり、志願兵で一年早く入隊しており、中隊では屈指の模範兵で誰しも一目おいていた。古兵の中でも「中仙道の友人なら」と受けがよかった。

初年兵には空腹はつきもの。いつもごろごろと雷のように腹が鳴る。飯上缶を洗いに行くのも役

得の一つ。古兵が残す残飯が目当てである。洗い場まで行く間にきれいになっている。パンの耳なんかは食べ残したらポケットの中へ遮二無二押し込んで持ち帰り、便所へ入って食ってしまおうという案配である。

ある時、炊事場裏の箱の中に残飯が盛り上がっているのを見つけ、手づかみでやっているところを週番兵に見つかり、強かにビンタを取られた。曰く「皇軍の体面を汚す」と。空腹に耐えるのも訓練の一つである。成る程！「早食い・早糞・早走り」は初年兵の必須条件だ。

演習中の食事ときたら、有りつ丈のものを飯盒にぶち込んで、フオークでガーッと口中へ押し込む。噛んでいたら暇がかかるし、早く腹がへる。これも戦闘間における給食の訓練である。初年兵は忙しい。たまに書く葉書一枚も消灯後便所へ行くふりをして、暗い電灯のなるべく近くを選んで、立ったままの走り書きである。

四方の浜へ上陸演習に行くことが度々あった。

井波の辺まで来たときは、もう着いたようなものなんだと思ったが、それからの長いこと長いこと。

立野ヶ原で演習中蝮を見つけ、早速皮を剥いで半分位を生で食い、残りをポケットに仕舞込んで持ち帰り、兵舎で焼いて皆に出したら「そんなもん食うて、今に体に銭形が出来るぞ」と誰も食べようとしなかった。

それかあらぬか、原隊へ帰ってからタムシに悩まされ「そりやみたことか」と笑われる。とうとう年末まで直らなかつた。

ある日、父母が立野の兵舎へ肥くみにくる（兵舎の肥くみは鑑札が要り、誰でも入れないことになってた）。早朝であったので不寝番が俺を呼びに来た。舎の後へ出てみたら荷車に肥桶を積んで待っている。半年振りの対面であったが、何か急に老けて見え、申し訳ないような気持ちであった。

長い話も出来ず、そそくさと肥桶の中から取り出したのは何とボタ餅の箱だ。巡察にでも見つかったら一大事。両親の必死の思いに涙ぐむ。お礼

夜間行軍で行き、漁船に乗って沖へでる。遠く灯台の青い光が敵の探照灯のように見え、夜明け前の敵前上陸演習である。真剣そのもの。上陸成功！（いつも成功だ）終わって民家で休憩する。種々食べ物を頂いた、ご満悦。いつも空腹を抱えている初年兵にはこたえられない。

ある時、四方出身の古兵殿の家へ連れて行って頂き、餅を搗いて持って来られたが、それこそ背中の皮が突つ張る程食いに食った。帰りに背囊の隙間につめるだけ詰め込んで、水筒の中へは酒を入れてもらって意気揚々と引き上げた。上陸成功、戦果大なり。重いも疲れたもないもんだ。

三 立野ヶ原演習の思い出

出陣も間近と思われる頃、立野ヶ原へ演習に行く。富山から作戦行動開始。演習をしながらの行軍はこたえた。この頃かなり太っていたので股ずれに閉口。夜間行軍はフンドシ外してポケットへねじ込み、前を開いてフリチンだ。軍装が重い、足のマメがつぶれる、いやはや散々のていたらしく。

の言葉もそこに舎内に持込み、皆で分け合つて頂いた。肥桶の匂いも何もなかった。

立野の兵舎からは我が家が見える程のところであったが、寄ってみる訳にもいかない。あの時、もう少し何か話をすれば良かったものを、素っ気なく突き放すように別れた。母が荷車の綱を引きながら、振り返り振り返り去っていった。さすがに父は振り向かなかつた。

四 最後の面会

入隊後初めての面会日があった。各人、面会通知を出せとのことで葉書を一枚渡される。当日は幸いに晴天で野外の面会である。誰もが家族と話すために散り散りになって短時間の一時を惜しむ。別れる頃になって、母が布袋の中から細長い包みを取り出した。「これが要るのではなかつたかい……」と、「なんか……」手にとってみたら短刀だ。徴兵検査以来準備していた物で、野戦に行くときの自決用だった。「生きて虜囚の辱めを受けない、死して汚名を残すなかれ」とは皇軍の鉄則

である。もし弾丸を撃ち尽くして自らも傷つき動けなくなつたときは、割腹して果てると日頃から言っていたので、父母はこの面会が最後になるものと思ひ、持ってきたと言う。

面会通知には何も書かなかつたはずだがと思つて聞いてみると、葉書の一部が消してあつたと言う。それは仁丹か何かを持つてくるように頼んだところを、軍の検閲で消したのだ。(遠征を悟られないための措置だつたが) 父母はかえつて出発の間近いことを感づいたようである。黙つてうなづき懷中に納める(後日これが役に立つた)。

五 出征前夜

正月過ぎ、福野出身の曹長殿がこつそり俺を呼んで、「下士官引率で外出するから支度をして出てこい。家へ帰つて一泊するからついて来い」と言うのである。天にも昇る心持ちである。その時は星二つになつていた。この一等兵の姿を親に見てもらいたいと、悠々と営門を出る。

呉羽駅から汽車に乗るといふことで、五幅の町

六 出陣

昭和十九年一月半ば、トラック島守備隊第二陣として、富山連隊は兵営を後にする。

当時既に戦況不利を伝えられ、軍の行動は秘匿されており、演習を装つての真夜中の出発である。見送る人もいない。街中はひっそりと静まりかえつてゐる。薄明かりの富山駅は人影もなく兵も無言。寒さがひとしお身にしみる。ホームの電灯も薄暗い。列車の窓は閉ざされて勇躍戦地に赴くという感情は湧いてこなかつた。

一瞬の不安も去つて、行く先の期待に胸の高鳴る思い。着いた所が広島である。船出までの幾日かは市内の旅館に入り、その間毎日、船積み作業。いよいよ出発の朝、旅館の窓下を通る兵列の中に中仙道君を見付け、外へ駆け出してしばしの名残を惜しむ。

「乗る船は違ふが向こうへ着いたらまた会える。元気で行けよ」と励まされた。彼は部隊でも屈指の模範兵として活躍しており、初年兵の憧れの的

を西に向かう。呉羽山に差しかかる頃、運悪く中隊長にばつたり出くわす。南無三しまつた! 「どこへ行くのか」…とがめる口調ではなかつたが、まさか「家へ帰ってきます」とは言えない。

曹長殿が「正月の飾りに呉羽の民家から竹を買いましたので、代金を払いに参ります」とはうまいことを…「よし、ご苦労!」と、中隊長は去つていったが何とも始末が悪い。「こりや帰るより仕方がないな」適当に付近を歩いて帰つてきた。ばれたら厳罰、営倉ものか、脱走兵の汚名を蒙ること必至である。最近の戦友会でこの事を披露し、隊長共々大笑いしたことである。

第一陣は年末に発つていった。正月早々出発準備。指揮班全員と自分の写真一枚、短い髪の毛と遺書一通を封筒に納めた。家へ送金を頼んだ者が大分あるようだが、俺は貧乏百姓の俸せがれ、酒保等にも行かなかつたので少々の貯金もある。有り金全部を家へ送金する。

でもあつた。(これがこの世の別れになるうとは、後日、撃沈した「暁天丸」に乗っていたのである)。

七 出航

いよいよ乗船。我々第二大隊の船は「新京丸」、赤錆の目立つ見すばらしい奴だ。聞けば六、〇〇〇トン級の貨物船とかで、兵員輸送にはかなり活躍し、今度帰れば廃船になるなどと聞かされては心細い限り、内心おだやかじゃないが、膨大な資材を積み込み、兵は空いたところへ蚕棚よろしくはい込む。荷物並もいいところ。ぶつぶつ言いながら何とか落ち着く。

ほとんどが召集兵であり、俺は指揮班ただ一人の新兵、なんとなく心細い。甲板上に出て見れば初めて見る瀬戸内の景は絵のように美しく、十隻程の輸送船と、護衛艦二隻「天草」「藤波」が、満を持して出航を待っている。

やがて船の動く気配。遠くかすかに「出征兵士を送る歌」のレコードが淋しげに聞こえた。見送る人影もない埠頭が夕靄にかすんで遠ざかる。

山々が影絵のようにうすれて闇に消えた。二度と見ることは無いであろう故国の姿。ひしひしと身を引き締められるような感動に銃を握りしめて武者奮い。

この頃、本土の周辺まで潜水艦が出没し、行く先の困難が思いやられる。夜半早くも敵潜の気配ありとのこと、対潜監視を各隊で立てる。出航早々この有様である。太平洋に出て、波のうねり高く船酔い続出する。出るものも無くなったへドを吐き続ける者、青白くなってうずくまったまま返事も出来ない者など、「飯上げどころじゃないや」と当番兵がぼやく。

硫黄島沖を通過するころは全く快適。時々甲板上に出て、おいしい空気をたっぷり吸う。某日、戦艦を旗艦とする連合艦隊に出会う。聞けばこれこそ大日本帝国海軍の戦艦「武蔵」とのこと。その堂々たる艦隊の偉容は太平洋を圧するばかり。我を忘れて見送った。

トラック島上陸後聞いた話では、敵機動部隊の護衛艦が狂ったように駆けめぐって爆雷を投下する。長い長い数時間、次第に白む夜明けと共に、護衛艦が救助に駆け回っている。おびたしい浮遊物と共に浮き沈みしている兵の姿が見える。無我夢中の救助作業が続く。やられたのは「暁天丸」だ。中仙道君が乗っていたはずだ。広島を発つときの勇姿が目に浮かぶ。

聞くと、宇品を共に出た船団は全部やられて、もう我々の三隻だけになっていた、ということである。もう一隻の「辰羽丸」は燃料不足のため救助作業に加われず、遮二無二トラック島目指していたが、敵機に捕捉され、爆撃により轟沈、松本歩兵第五十連隊の主力は悲惨な最期を遂げる。

「新京丸」も同様トラック島を目指すはずであったが、トラック島は敵の大空襲下にあり、なお

接近を察知して、トラック島から撤退した海軍の最後の栄光の艦隊であったのだ。何も知らぬ我々は連合艦隊の健在を信じて欣喜雀躍、しかし長くは続かなかつた。敵潜水艦の追隨を受けていたのである。

八 敵潜の攻撃

某日、突如「雷跡ッ！」と叫ぶ対潜監視の声に洋上を見やれば、早やまつしぐらに突進してくる三条の影。南無三、今にも吹っ飛ばかと思いきや、見事に躲した舵の冴え。さすが船長さん、千軍万馬の腕の見せどころ。ボロ船のことはすっかり忘れて「万歳」を叫びたい心境である。

この頃は船団も離ればなれとなり、他の船を見ることはまれであった。敵襲に備えてジグザグ航行とか。

九 「暁天丸」被雷

二月十七日夜半とおぼしき刻、はるか右前方を進んでいた船が突如大火柱を吹き上げ、落雷のような大音響、はっと息をのむ。瞬時さらに大音響

機動部隊が近づいているということで、急遽サイパン島守備のため上陸することとなる。

久方ぶりに見る島影。宇品を出てから三十余日、馴れたとはいえ船はもうこりこりだ。やっぱり陸さんは土を踏んでいなけりや話にならん。次第に近づく南の島、初めて見る珊瑚礁の海は、あくまで透き通って薄緑色に輝き、あるいは琥珀色ともいえるのか、えも言われぬ美しさである。

椰子林の風にそよぐ風情、目を射るような白い砂浜、しばし戦場を忘れるような風景である。船は静かに湾内に入り上陸が始まる。慌ただしく装具を付け弾薬箱を肩にタラップを降りる。土を踏んだ途端に下から叩き上げるような衝撃を受けてよろけた。長い間の船の生活に調子が狂っているのだ。危うく弾薬箱を放り出すところであった。

しばし四股を踏むように足馴らしをして歩き出し、ようやく陸地に落ち着いた。土といっても珊瑚礁のそれは碎石の上を歩くようで何とも感触が悪い。

住民の姿も見えて、ピッポーと玩具のような汽車が走っており、瞬時おとぎの国へ来たような心持ちである。この一時は誠にのどかな南洋の楽園であったが、数カ月後には凄惨な激戦地と化し、遂に玉砕島となる。

ともあれその時はやれやれ一安心とばかり装具を降ろして休憩となった。

【解説】

体験記執筆者が、入隊後、保健隊行きとなっていた原隊の歩兵第六十九連隊に動員が下り、野戦隊に戻る。昭和十九年一月半ば、トラック島守備隊第二陣として、富山連隊は兵営を後にする。

当時既に戦況不利を伝えられ、軍の行動は秘匿、演習を装った真夜中の出発で、薄明かりの富山駅は人影もない。寒さが身にしみ、勇躍戦地に赴くという感情も湧いてこない。

第二大隊の乗船は「新京丸」、十隻程の輸送船と、「天草」「藤波」の護衛艦二隻が出航を待っている。

ほか、同島にて訓練中の南東方面艦隊所属の航空兵力があった。

これらの部隊の指揮系統が複雑であったところへ当日の飛行隊員は外出を許されていたこともあって、必然的に防空、防衛には著しい混乱をもたらした。同島の各飛行部隊所属の飛行機は約百三十五機有ったと言われるが、その内七十〜八十機は出動可能な状況ではあったが邀撃はスムーズには行われなかった。そしてこの空襲によって、我が方の実働可能な飛行機はわずか数機を残すのみとなった。

最も重要なことは、絶対国防圏の要衝であるトラック島が敵の攻撃の蹂躪に任せたと、他方面への精神的な影響であった。

体験記ではトラック島空襲によるサイパンへの一時避難のみに触れているが、結果的に同部隊はトラック島守備第二陣として同島の防備に当り、制海権、制空権を奪われたなかで自活しながら防禦陣地を構築、昭和二十年三月には陣地はほぼ完

同行の僚船は全部やられて、三隻だけになっていた、ということである。もう一隻の「辰羽丸」は爆撃により轟沈、松本歩兵第五十連隊の主力は悲惨な最期を遂げる。

「新京丸」も同様トラック島を指すはずであったが、トラック島は敵の大空襲下にあり、急遽サイパン島守備のため上陸することとなる。

トラック島は広大な我国の絶対的国防圏の外縁にある。これらの戦備強化のためには大規模の船舶の大増が問題であった。これらのは達成は国力の破綻さえ来たす不安があり、一方では、これらの帰趨が中部太平洋などの防衛線強化の確信が得られないことも明らかでもあった。

このような情勢下において、二月十七日、敵機動部隊によるトラック島大空襲が行われた。この空襲は絶対的国防圏強化の要である船舶問題の重要性を再認識させるものでもあったという。

当時トラック島には海軍の第四艦隊、南西方面艦隊所属の航空兵力及び陸軍第五十二師団主力の

成したが、米軍に対して使用されることなく終戦を迎えている。